

◇封禪・郊祭と蓬萊三島の仙人

倭は、中国からどう思われてきたのか。古墳は如何なる思想から生まれたのか、そこでどのような祭祀が行われてきたのか。以下から見渡せるものと思う。

最初に、封禪や郊祭の儀礼は、不死身を叶えたとする蓬萊三島の仙人たちと、切つても切れぬ関係にある、と強調しておきたい。

封禪とは、五帝期最初の黄帝が泰山の山頂で円壇を築いて天を祀り（封祭）、続いて山麓の梁父山で土地を方形に均して地の神も祀った儀式（禪祭）のことを言った。

かくして、黄帝は天帝や仙人らと親しく交わり、人でありながら不死身に成り得たという。即ち、現人神の天帝になったのだ。これが最初で最も盛大な封禪とされるが、その封の礼は明らかでない。

ついで、堯から跡を託された舜が封禪に臨んだ。彼は天体の動きを見て天意に適うと知るや、

上帝（五帝）に対して類の祭（撰政する事類を報告する）を行い、六宗（四時・寒暑・日・月・星・水旱）に禋（いん）の祭（精進潔斎する）をし、山川に望（ぼう）の祭（国中の名山大河を祀る）をして、群神（丘陵・墳衍・古の聖賢）をあまねく祀った後に諸侯の玉器を収めて吉日を選び、並み居る臣下たちの前でこれを分け与えた。

その年二月、東方に巡守して泰山に到ると、柴を焚きながら泰山を祀った。続いて有名山河（九州の名山・大河など地の神）に位を贈って望祭した後、東方の諸侯らとも会した。五月に南嶽の衡山に至り、八月に西嶽の崑崙山に着き、十一月には北嶽の恒山に至って同じく振舞った。こうして、五年に一度は巡狩した。黄河の治水に成功した禹も、このやり方にならったという。

周公は幼い成王を助けて政に就くと、后稷（棄）を南郊に祀って天（農耕の天神）に配し、文

王を明堂（祭祀を行う宮殿）に祀って上帝（皇祖）に配した。それ以前に、火徳をそなえた文王は赤い鳥が現れるという瑞祥によつて封禪の天命を受けたが、泰山での封祭を行わず、武王も殷を破つた二年後の天下が未だ安定しない時期に逝つてしまった。このことで、続く成王が封禪を成したとしても、道理に適うとされた。

そのこともあつて、周では冬至の日に南郊して天を祀る（郊祭）とともに、日が長くなるのを祝つた。夏至には、北郊して地の神を祀る儀式（郊祭）を行つてきた。いずれも楽舞が用いられたとのことだ。

春秋の秦では、雍州の地が高壮で神明なことから時（祭りの庭）を造つて上帝を祀つたところ、諸神の祠が集まつて来たという。晩年の周もここで郊祭をとり行つた。

このように、封禪や郊祭を成し遂げるには、偉業を成した帝王が天命を授かつた上で、黄帝や舜のごとき儀礼を尽くすべきとされた。その天命は様々な祥瑞を伴つて現れるというが、中には天命を受けても天下を治める功績が十分でない者や、その徳沢があまねく行き渡らない者もいた。古来、偉業を打ち立てた帝王で封禪を念願しない者はいなかつたとされるが、歴史上でしかと封禪を果した得たのは、秦王政（始皇帝）が最初の人だった。以来、三国志時代までに、前漢武帝と後漢光武帝の二人がこれを成就できたに過ぎなかつた。

しかし封禪を成し遂げたからと言って、不死身に化す道理などあるはずがない。にもかかわらず、始皇帝も武帝も蓬萊の仙人らに一刻も早く出会つて不老不死の仙薬を手にしたと焦つたあまり、方士のつくり話に散々振り回されたり、神仙の方術つまりペテン師の術策にまんまと引つかかたりした。始皇帝に至つては、狂気の沙汰に及んだとしか言いようがない。

【秦始皇帝の封禪】

始皇は帝位に就いて二年が過ぎると、儒者や博士ら七十人を伴つて泰山の近くに至つた。そこ

で封禪や望祭について協議させたが、人ごとに違うことから儒者全てを罷免して遠ざけた。

意を決していた始皇は南側から泰山に登る道を切り開くと、山頂に至って自らの徳を称える石碑を建立し、封祭を遂げた証拠として残した。その後は、北側から下山して梁父山で禪の祀りも行った。始皇はその礼を極秘にして記録にも残さなかった。意見を退けられた上に、封祭にも参加できなかった儒者らは、始皇が登山中に暴風雨に遭遇したと聞くや、口々にこう諂っていた。

「始皇は泰山の頂を目指したが途中で嵐に出遭ったため、大きな松の根元に身を寄せながら難を避けていた。その後は山頂に至るどころか、ほうほうの体で下山して来た」

【前漢武帝の封禪】

前一一〇年春、天子は封禪を行うべく海岸地帯に行幸した。

四月、泰山の東麓で太一神を祀る礼でもって望祭を終えると、侍従の霍子侯だけを連れて泰山の頂に登り、そこで念願の封祭を敢行した。翌日に北側から下山し、日を改めてから山麓の梁父山で禪祭も成し遂げた。その時の詔には、こうある。

「私は取るに足らぬ身にかかわらず至高の尊敬を受けたが、その任に堪えないのではと懼れている。ところが太一神をお祀りしたところ、祥瑞となって姿を現されたようでもあり、ついには封禪を叶えてこの身を新たにできた。ここに、感謝の気持を抱きつつ新しい政を始めたいと思う。民百戸につき牛一頭・米十石を下賜し、・・・事が二年以前の件については、裁判沙汰とせぬよう」

【後漢光武帝の封禪・郊祭】

高祖の末裔だった光武帝劉秀は、百越率いる長沙国の白水郷（河南省南陽郡）から出て洛陽の太学に学び、戦国策や史記を読みこなすほどの知識人だった。物事の的確な判断と対処の仕方を歴史から学び取り、孫子の兵法にも精通していた。

二五年六月、彼は洛陽に都して漢朝を再興すると、柴を焚いてその高煙が天に通じたところで

皇天上帝にお礼の言葉を告げるとともに、水・火・雷・風・山・沢の六宗に禋祭し、ついで望祭して山河など后土も祀った。ここに皇帝に就いて建武と改元し、天下に大赦した。同時に、国政に携わる高官の登用に際しては、実務の才能や知識の有無よりも徳・孝行・清廉を備える気骨の士を重視して、天下にこれを奨励した。この気風は学問の世界だけでなく庶民の間にも広まった。

『後漢書』「光武帝紀」、「(二五年) 六月末、皇帝の位に即く。燔燎はんにりようして天に告げ、六宗に禋

し、群神に望ぼうす。……ここに於いて建元して建武と為し、天下に大赦し……」

☆「燔燎して天に告げ」は、柴を焚いて祭り、高煙が天に通じたところで天に報告すること。五六年二月、光武帝は魯国から泰山に向けて巡幸した。遠くから泰山を望む地で柴を焚きながら望祭した後、泰山の頂と麓の梁父山で封禪を成し遂げた。

建武中元二(五七)年春正月に初めて北郊を立て、后土(地の神)を祀った。その直後、倭奴国が海を渡ってはるばる朝貢してきた。

『後漢書』本紀、「二年春正月辛未、初めて北郊を立て、后土を祀る。東夷の倭奴国王、使を遣わして奉獻す」

ところがその翌月、帝は六十二歳で急逝した。遺勅には、こうあった。

「朕は民に益するところが無かったので、葬送の品は瓦器を用い、金銀銅錫などで飾らぬようにせよ。墓も自然の山形を利用するに止め、墳丘を築いてはならぬ。できるかぎり儉約を宗とせよ」跡を継いだ明帝は、高祖の詔も前漢文帝の詔も守らなかつた。洛陽郊外の黄河近くに壮大な円墳(凡そ直径百二十丈、高さ二十丈)を築き、そこに光武帝を葬ったのだ。

『史記』漢文帝の詔、「霸陵を治むるに、皆、瓦器を以てし、金銀銅錫を以て飾りと為すを得ず。(土を盛り上げる) 墳を治めず、省(節約)を為し、民を煩わすこと無きを欲せり」

【神武の郊祭】

★光武帝の封禪から二五〇年足らず後、神武は大和朝廷を開くと、まつりののち靈時を鳥見山の中に立て、封禪に準じた郊祭を執り行つて皇祖天神を奉つた。

「神武紀」、「我が皇祖の靈、天より降りみて、わが身を光し助けたまえり。今、諸の虜もろもろすでに平けて海内事無し。以て天神を郊祀りて、用て大孝（皇天にしたがうこと）を申べたまうべし、

「靈時を鳥見山の中に立てて、皇祖天神を祭りたまう」

『古語拾遺』（忌部氏家記）、「靈時を鳥見山の中に立つ。天富命、幣を陳ねて祝詞して皇天あまつかみを禮祀り、群望を遍祓りて、・・・」、

「聖皇（天皇）の登極（天つ日継ぎしろしめ）して、終を父祖に受けたまい、上帝（五帝）あまつかみを類り、六宗を禋り、山河を望り、群神を偏りたまう。然れば、天照大神（日神と高皇産靈）

はこれ祖これ宗、尊きことならび無し」

つまり、神武は高皇産靈が封禪を成したとしても道理に適うと見て、彼に代わつて柴を勢いよく燃やす中で封禪さながらに郊祭し、その高煙が天に通じたところでお礼の言葉を申し述べるとともに、皇天二神を天に配して皇祖皇宗に奉つた。加えて、天照御魂神（真経津鏡）および草薙剣を二神の天璽と定め直したことや、若かりし頃の豊受皇太神（御饌津神）を農耕神に列して、秋になると新穀を捧げることもお知らせした。

☆鳥見山北麓の尾根上には、四世紀初めに造られた日向型の柄鏡形前方後円墳が鎮座する。